

## 紹介

阿部泰郎著

### 『中世日本の世界像』

日本の中世的世界については、著者はすでに前著『中世日本の宗教テキスト体系』において、宗教テキスト学からアプローチし、一つの体系把握を試みた。すなわち、主に神道と仏教を対象に、一つの儀礼から生成された多くの位相を持つテキスト（経典、儀軌、次第、図像、日記、縁起、説話など）を丹念に検証し、それらを総合化、体系化したものである。かかる手法を活用し、文学研究の方法に立脚しつつも、近接諸分野の最新成果を積極的に摂取し、中世日本の世界像を意欲的に提示しようとするのが本書である。

本書は、序章、総説Ⅰ・Ⅱ、終章を除き、三部構成、各四章ずつの全十二章からなる。序章では中世的世界の誕生を物語る二つのテキストから筆を起し、研究史を概観した上で、問題意識や研究方法などを述べる。総説Ⅰでは『信貴山縁起』絵巻から、「行

基図」、三国世界観などにまで説き及び、縁起の言説と図像の流布において大きな役割を果たした聖とその勸進活動に注目した。総説Ⅱでは『百鍊抄』を座標に、院政期の文化を通時的に俯瞰する。

第一部「芸能の世界像」は、音声、童性、神話から中世文化を捉え直す。共鳴する神仏の音声は聖やこどもの声を通して俗世と繋がり、芸能者たちは異性装などで性をも越境するという。これを踏まえ、王権神話を生み出した中世日本紀の世界観とその形成過程を論じる。

第二部「知の世界像」ではテキスト分析を通して知の形態と様式、その集成と統合から中世的知の全体像を再構築する。まずは説話の枠組を分析し、著者が「対話様式」と呼ぶ特徴的な構造を見出す。そして経典から歴史物語などにわたり「語り」を「書く」テキストの位相と、その系譜、生成を追いかける。次に守覚法親王が記述した「紺表紙小双紙」を手がかりに、朝廷儀礼から寺院社会、文芸領域における「次第」という書記体系の発展的継承を明らかにし、さらに中央から地方へと流伝していく知のネットワークを聖教調査の結果から

復原する。最後に「六道釈」というテキストを取り上げ、筆者が「知の巨人」と位置付ける慈円の宗教、政治、文学の遍歴を提示する。

第三部「仏神の世界像」では神道曼荼羅を読み解き、本地垂迹に基づいた新たな霊地や（聖なるもの）の誕生を描くとともに、元興寺と長谷寺を事例に、古代寺院の中世的霊地への変貌を概観する。また往生をめぐるテキストを分析し、霊地に投影される世界観の変容を捉える。最後に鎌倉仏教界を魔界として描く『七天狗絵』を読み解き、その論理と作成の意図を明らかにする。

終章ではここまでの議論を総括しつつ、本書で取り上げた数多くの史料の中でも、文字と図像の複合する絵巻（およびそこから派生した宗教曼荼羅）をクローズアップし、世界像を映し出す鏡として位置づけた。本書は、幅広いテキストを博搜、分析し、テキスト学の一つの達成でありながら、歴史・宗教・思想などの分野にも研究の進展をもたらすものと言えよう。また、全体を通じて柔らかな筆致で「絵解き」することによって、広がりのある中世的世界を再現する点が本書の魅力である。研究者だけで

はなく、中世宗教・文化に関心のある方々にも広く本書を推薦したい。

(A5判 六〇四頁 二〇一八年二月)

名古屋大学出版会 税別六八〇〇円)

(殷捷 京都大学大学院文学研究科

博士後期課程)